

第 1 回国際かきシンポジウム開催趣旨

財団法人かき研究所は 1961 年 10 月、文部省(現文部科学省)所管の財団法人として設立され、今日まで 40 年以上にわたり、カキ類を中心とする各種海産無脊椎動物の種苗生産と養殖等に関する試験研究を行い、もって広く学術ならびに産業の発展に寄与してまいりました。フランスガキやエゾアワビの種苗生産に関する研究業績は広く知られているところであり、当研究所が宮城県に設置された背景には、松島など仙台湾沿岸におけるマガキの種苗生産が我が国だけでなく世界的に有名であったということがあります。すなわち、これらの宮城県産種ガキは大量に北アメリカ太平洋岸(1923 年-1978 年)やフランス各地(1965 年-1980 年)へ輸出されていました。しかし、移植されたこれら宮城のマガキからの種苗生産が現地で可能になったために今では輸出されなくなりました。つまり、宮城ガキは、アメリカ・カナダ・フランスで新たな産業種として完全に定着したほか、さらにこれらの国々からイギリスや南アメリカのチリなどへと移植され、世界各地に根付きました。

このように、従来生息していなかった国々へ移植された宮城のマガキは、もはやおらが国宮城の冬の風物詩にふさわしい存在だけにとどまらず、名実ともについにコスモポリタンガキになったのです。特に料理を一つの芸術の域にまで高めた食通の国フランスでさえも、その味わいの奥深さが高く評価されていることは当研究所にとっても本当に喜ばしい限りです。

現在、世界の漁業生産量の約 40%が国際貿易の対象となり、とりわけ我が国は世界最大の輸入国であります。さらに、WTO等では、水産物貿易の一層の自由化を求める主張が活発であり、カキについても 1995 年には米国等の、また 1998 年からは韓国産の生食用カキの輸入が自由化され、外国も含めた産地間競争はますます激化しようとしています。このように緊迫した内外の情勢下で、当研究所がなすべきことの一つは、かつての宮城の種ガキのような国際競争力のある優れた製品の開発を目指すことです。それと同時に、この国際競争力が真の国際貢献から生まれることを思えば、現在世界各地に根付いた宮城ガキの子孫のアフターケアにも努力すべきです。これに関連して、最近海外のカキ研究者等から、「国際カキ学会を立ち上げ、その第 1 回のシンポジウムをかき研究所主催により日本で開催してはどうか」という提案が出てきました。その理由の一つには、ホタテガイやアワビについての国際シンポジウムが定期的に世界各地の持ち回りで開催されているのに、世界一の養殖生産量を誇るカキ類(その中でもマガキが首位)についてはこれまで一度も開かれてこなかったことが挙げられます。しかし、それ以上に大きな理由は、今や完全にコスモポリタン化して世界に羽ばたいている宮城原産のマガキが各国の在来のカキと生物学的・産業的・食文化的にどのように係り合いながら調和していったかについて考察し、その結果を将来の地球規模でのカキ産業のあり方に反映させることが重要であるということです。

現在の幾何級数的な人口増加がそのまま続くとすれば、2050 年には世界の総人口は 100 億に達すると予測されており、陸上での食料増産がすでに限界に来ている以上、海洋での生物生産の増加と適正分配についての人類の知恵が強く求められています。地球環境調和型の水産増殖システムと健康増進戦略の構築、すなわち、「海を生かし、海に生きる」ための知恵の創造と啓蒙活動が今こそ重要です。このためにこそ、財団法人かき研究所は第 1 回国際かきシンポジウムの開催を企画しました。

(2004 年 8 月 財団法人かき研究所 理事長 森 勝義)